

## 登録競技者数と東北インターカレッジ出場者数の推移

### —東北学生陸上競技連盟について—

藤井 邦夫

A Study on the changes of the populations of the registered athletes and the participants in The Inter-College Athletic league of Tohoku (Tohoku Gakuren)

FUJII Kunio

---

There is a tendency that many elite high school track & field athletes want to attend universities in the Kanto area rather than Tohoku. Therefore there is a tendency that the universities of Kanto's area produce more prizewinners. It is important therefore to analyze and research the reason for the decrease of the population over the 10 years from 1991 of the registered athletes in Tohoku gakuren and their participation in the Inter-college athletic meet.

Key words : student athletes, performance of athletes, female athletes

#### 1. はじめに

東北学生陸上競技連盟（以下、東北学連）所属の陸上競技者が日本インターカレッジ（以下、日本 IC）等の全国大会において活躍し、入賞する機会は関東学生陸上競技連盟（以下、関東学連）所属競技者に比べると非常に少ない（注 1）。学生陸上競技界では、関東学連に競技力の高い競技者が集中し、学生陸上競技界をリードしている現状がある。

本稿では、「学生陸上競技界における競技力の比較分析」（本紀要 Vol.32No.1）を先行研究として、東北学連の競技力向上を計る上で重要と考えられる東北学連の登録競技者数と東北 IC 出場者数の推移を 1991 年からの 10 年間の状況について調査・分析し、競技力向上のための基礎資料を得ることを目的とする。

#### 2. 先行研究のまとめ

（社）日本学生陸上競技連合研究機関誌「陸上競技研究」第 40 号で明らかにされたように、「競技レベルの高い高校生競技者が関東の大学に進学し、競技を続ける」ケースが多いことは明確にされたが、その根拠として考えられる「関東の大学が指導環境に優れている」かどうかについては、先行研究で裏付けることができなかった。

しかし、学生競技者の記録の伸び率に着目してみると、中・長距離種目以外の種目では、関東学連以外の学連所属競技者の方が記録の伸び率が高い傾向であることが明らかにされた。これらのことから関東学連登録競技者の競技力の高さは、指導力を含めた練習環境によって維持されているというよりも、競技者の本来持っている資質の高さに負うところが大きいものと考えられる。

すなわち、関東学連の競技力は、優れた資質

を持った競技者の確保と指導環境の二つの大きな要素によって維持されていることが考えられ、東北学連登録競技者の競技力を向上させるためには、関東学連の例に見られるように、優れた資質を有する競技者の確保と指導環境の改善の二つの要素を充実させることが重要だと考えられる。

競技者の確保についての対応策の検討に資するために、東北学連の'91年度から10年間の登録者数と東北IC出場者数に着目し、競技者数の推移の状況の把握および数的変化の原因を検討する。

#### 4. 結 果

##### 1) 登録競技者数について

表-1は、'92年度から'00年度までの(社)日本学生陸上競技連合(以下、日本学連(8地区

表-1 各地区学連登録者数の推移(1991～2000)

男 子	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年
北 海 道	412	455	455	469	510	505	468	470	495	491
東 北	687	734	777	770	766	721	705	663	645	630
関 東	4,165	4,373	4,568	4,781	4,707	4,556	4,457	4,386	4,304	4,352
北 信 越	524	566	572	596	573	569	575	587	568	561
東 海	847	835	886	957	885	894	882	836	818	833
関 西	1,828	1,994	2,079	2,111	2,003	2,018	1,956	1,844	1,763	1,782
中国四国	889	895	1,026	1,048	1,085	1,127	1,130	1,070	1,015	1,001
九 州	1,189	1,221	1,340	1,364	1,315	1,341	1,246	1,161	1,166	1,143
	10,541	11,073	11,703	12,096	11,844	11,731	11,419	11,017	10,774	10,793

女 子	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年
北 海 道	152	149	165	193	206	174	160	161	147	147
東 北	185	223	238	236	252	217	199	170	153	159
関 東	1,116	1,198	1,268	1,386	1,405	1,404	1,356	1,239	1,193	1,151
北 信 越	126	147	141	143	149	165	165	149	138	124
東 海	349	342	395	386	380	458	328	321	316	289
関 西	680	757	786	819	819	771	753	718	664	648
中国四国	244	292	308	351	370	322	317	284	239	245
九 州	336	375	382	427	429	412	389	327	291	311
	3,188	3,483	3,683	3,941	4,010	3,923	3,667	3,369	3,141	3,074

合 計	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年
北 海 道	564	604	620	662	716	679	628	631	642	638
東 北	872	957	1,015	1,006	1,018	938	904	833	798	789
関 東	5,281	5,571	5,836	6,167	6,112	5,960	5,813	5,625	5,497	5,503
北 信 越	650	710	713	739	722	734	740	736	706	685
東 海	1,196	1,177	1,281	1,343	1,265	1,352	1,210	1,157	1,134	1,122
関 西	2,508	2,751	2,865	2,930	2,822	2,789	2,709	2,562	2,427	2,430
中国四国	1,133	1,187	1,334	1,399	1,455	1,449	1,447	1,354	1,254	1,246
九 州	1,525	1,596	1,722	1,791	1,744	1,753	1,635	1,488	1,457	1,454
	13,729	14,553	15,386	16,037	15,854	15,654	15,086	14,386	13,915	13,867

(単位：人)

連盟の連合体))の登録競技者数である。

表-1から、登録競技者数は'94年度の16,037名をピークにやや下降を見せている。男女別にみると、男子は同様に'94年度に12,096名のピークを迎え、女子は1年遅れて'95年度に4,010名でピークを迎えている。全体と男子は'94年度、女子は'95年度以降緩やかな減少傾向にある('95年には福岡で第18回ユニバーシアード競技夏季大会が開催され、開催時期と競技人口増のピークがほぼ一致しており、ユニバーシアード大会に向けての意識などの盛り上がりとの関係が推察される)。東北学連の登録者数については、全体でみるとピークが'95年度の1,018名であるが、'93年度にはほぼ同数の1,015名、'94年度には一度減少し、1,006名である。東北学連の'95年度のピークは、女子の増加によるものである。男子は、東北学連のピークが'93年度の777名であり、

'94年度には数値だけでみると770名と大きな変化はない(他の学連や全体としては、競技者数がピークを迎えた年である)。

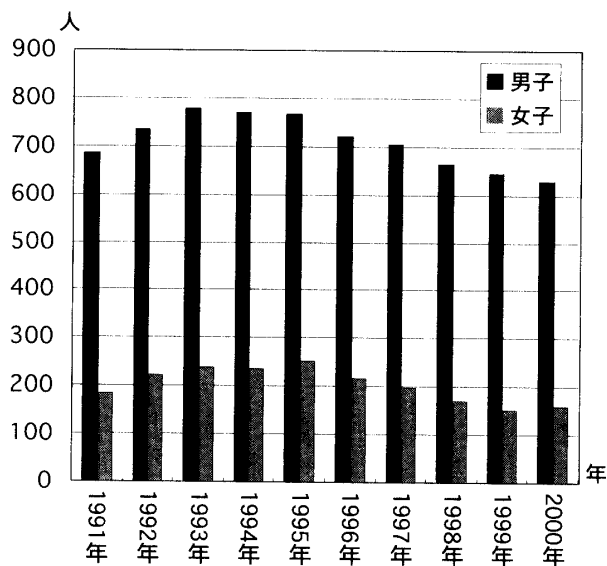


図-1 過去10年間の東北学連男女登録者数の推移

表-2 東北 IC 種目別出場者数 (男子)

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001
100m	46	51	50	38	45	43	50	45	44	48	46
200m	40	43	40	41	39	38	41	37	35	35	39
400m	37	38	35	32	39	39	39	33	32	29	31
800m	32	34	34	28	33	32	30	23	36	28	42
1500m	47	54	46	45	39	40	39	36	46	38	39
5000m	40	43	47	44	43	37	40	32	40	44	44
10000m	30	32	30	28	31	22	23	22	31	35	33
110mH	20	22	22	18	19	14	13	11	13	18	20
400mH	20	26	23	19	23	16	24	20	16	20	29
3000mSC	26	19	39	32	33	23	23	28	24	28	31
10000mW							2	5	7	8	8
4×100m	17	16	16	15	16	13	16	12	11	13	15
4×400m	15	15	13	13	16	14	16	12	12	14	14
HJ	11	19	12	11	10	10	11	12	12	11	16
PV	11	11	13	8	11	13	12	13	12	9	8
LJ	27	32	31	27	32	21	23	23	23	21	24
TJ	17	19	18	19	15	16	18	16	22	17	21
SP	15	19	18	16	13	15	16	14	12	12	13
DT	17	19	20	19	14	17	16	16	9	12	15
HT	11	12	10	8	9	9	13	10	8	8	11
JT	19	24	26	22	19	20	17	16	18	16	18
十種競技			7	7	4		9	6	9	8	7

(単位：人) (但しリレーはチーム数)

図－１は、東北学連における登録者の推移を示している。登録者の数は、'00年度まで、男女ともに右肩下がりの減少傾向を示している。年間の全体の登録者数は、'91年度を基準とすると'95年度まで増加傾向を示し、'93から'95年の３ヶ年は1000人を超えていた。しかし、'96年度以降は徐々に減少し、'99、'00年度には800人を下回り、過去10年間の中で最盛期の'95年からみて5年間で約20%の減少である。男女別に過去5年間でみても、'95年を基準として、男子は約15%、女子は約40%の減少である。

## 2) 東北インターカレッジ出場者数について

表－2、表－3は、東北インターカレッジ（以下、東北IC）の男女別に出場者数であり、図－2と図－3は、男女別の東北ICのブロック別出場者数の推移を'91年度から追ったものである。男子においては、調査した10年間で登録者数が最も多かった'93年度が東北ICの出場者数も多い。一方、女子において登録者数が最も多かったのは'95年であるが、東北ICの出

場者数は'93年度が一番多い。

表－3から、東北IC女子の種目別出場者数を概観すると、長距離種目、中でも5,000mで顕著な減少が見られる。これにはレースの距離数の変更が関係していると考えられる。つまり、女子長距離のレース距離は'94年度までは3,000mと10,000mであり、(3,000mへの出場者も20名以上いた)'95年から3,000mが5,000mに変更（注－2）になり、15名前後の出場者になっている。レース距離の変更に対する競技者の適応ができずに、出場者が減少したと推察できる。

表－2、表－3から、出場者数の傾向をみると、男子は短距離と中・長距離種目が、そして跳躍と投擲種目がほぼ同じような変動を示している。一方、女子の変動には傾向が見られず、また、女子の競技者の場合には競技者数も多くないために、少人数の出場者の増減でも全体に大きな影響を及ぼすことが考えられる。主だった所では短距離種目の減少が目立つ。

表-3 東北IC 種目別出場者数（女子）

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001
100m	20	22	27	23	22	21	20	17	18	15	11
200m	13	15	18	22	19	21	15	14	7	16	8
400m	9	9	12	15	13	12	9	10	11	10	11
800m	15	13	16	17	14	13	14	16	12	11	13
1500m	15	18	27	16	16	14	14	16	12	14	16
※ 5000m	16	20	22	23	15	12	12	14	12	13	17
10000m	8	8	7	4	5	8	8	9	6	5	9
100mH	9	18	11	14	10	9	7	9	9	7	8
400mH	10	8	9	8	8	7	6	7	5	4	7
5000mW							2	3	4	2	6
4 × 100m	8	9	12	11	11	7	7	5	5	7	8
4 × 400m	6	6	8	6	6	4	7	4	4	2	4
H J	9	11	13	13	12	11	10	7	4	8	6
L J	14	18	21	15	13	12	15	14	10	5	11
T J	0	5	6	7	8	8	6	4	3	4	5
S P	6	8	8	6	9	8	8	8	6	8	9
D T	8	12	4	6	9	10	10	8	7	8	7
J T	12	10	11	8	6	9	6	6	4	4	8
七種競技			3	1	0	0	1	2	3	1	1

※ 1991年から1994年までは3000m

（単位：人）（但しリレーはチーム数）

## 5. 考 察

東北学連の登録競技者が徐々に減少していることから、東北学連自体の競技者確保への対応は最優先の課題である。競技人口の減少は、昨今の少子化の影響で、中学や高校における競技者数の減少が根底にあることが推察される。しかし、緩やかな減少傾向とは別に、東北学連においては最近5年間で女子の競技者数が40%の減少したことについては、少子化の影響ということだけではないと考えられ、問題の原因を追求し、積極的な方策を導入する必要がある。

競技者数の減少が著しい女子種目を東北 IC

出場者の女子競技者数から具体的に拾い上げると、100m、4×100m、4×400m、400mHなどの短距離種目、5,000m、跳躍種目などが目立つ。5,000mで競技者数が減少した原因には、レース距離が3,000mから5,000mに変更になったことがあげられる。3,000mから5,000mへの適応が出来なかった理由としては、生理的・体力的に適応できないということよりも、精神的な面に問題があるのではないかと考えられる。女子3,000mレースの場合は、適当なトレーニングを行うことで競技に参加していたと考えられるが、5,000mは、3,000mに比べて相当のトレーニングの質・量を荷するこ

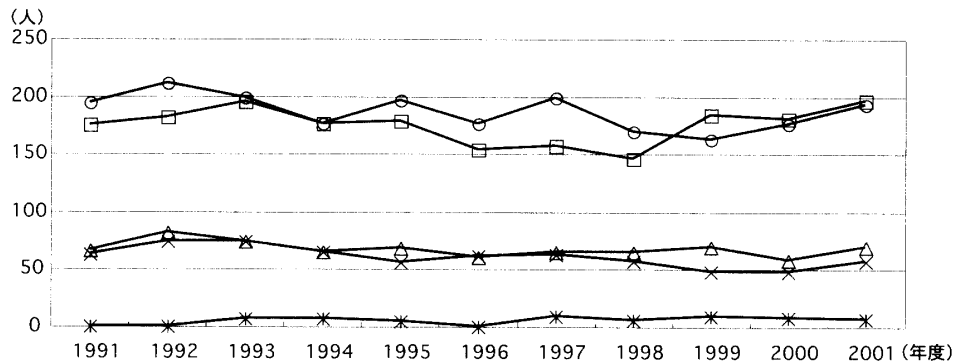


図-2 東北ICブロック別出場者数の推移 (男子)

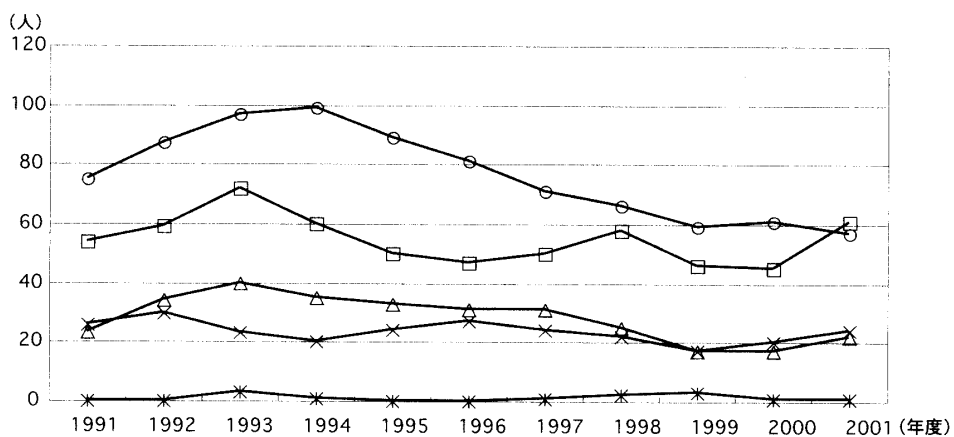


図-3 東北ICブロック別出場者数の推移 (女子)

となしには競技に参加することはできない種目であると判断された結果であろう。また、5,000m へのトレーニングを避けた結果として競技人口が減少しているとも推察できる。指導者の側でも学生競技者の資質等に則した指導法を考慮するなどの対応策が必要であろう。また、'95 年と '00 年の女子競技者数を比較すると、100m22 名が 15 名 (7 名減)、400mH (ハードル) 8 名が 4 名 (4 名減)、4 × 100m11 チームが 7 チーム (16 名減)、4 × 400m6 チームが 2 チーム (16 名減)、走高跳 12 名が 8 名 (4 名減)、走幅跳 13 名が 5 名 (8 名減)、3 段跳 8 名が 4 名 (4 名減) という結果が出ている。

魅力ある指導環境を整えるには、練習環境をはじめとしたハード面の充実と練習内容を中心としたソフト面の充実が考えられる。

競技者の確保に関する方策として、学生競技者に人気のある種目に対しては、指導面での充実を図り、競技者の満足度を高めるとともに競技力を向上させる適切な指導が必要であろう。競技会における結果が得られれば、入部希望者が増加することが期待できるのは関東の大学をはじめとした成功例が示している。

また、人気の低下している種目に関しては、高校での陸上競技経験者に積極的な働きかけを行うなどの努力で入部希望者を確保し、競技人口を増やすことが急務である。特に、先行研究で明らかにされたとおり、中・長距離種目以外の短距離、跳躍、投擲種目においては、関東学連以外の学連にも記録を伸ばさせた競技者が多く存在する。つまり、高校時代に顕著な競技実績を示していなくても、基本的な資質を持っていれば、競技力を向上させやすいのは、短距離、跳躍、投擲種目ということになる。東北学連において競技者数が少ない種目は、短距離、跳躍、投擲種目であるが、資質的に優れた競技者を確保して、適切な指導が加えられれば、競技力の向上を図ることができよう。特に、跳躍、投擲種目は、東北地区の高校陸上競技界の指導者不足がいられていることから、陸上競技部を有す

る東北の各大学においては、指導スタッフ（特に、跳躍、投擲種目）を充実させ、魅力ある練習環境を整えることが必要である（例えば、跳躍や投擲種目の練習場を高校生に開放し、同時に指導するような方策も有効であろう）。

## 6. 今後の展望

関東学連加盟大学への競技者の進学の原因が、練習環境にあるのか指導者の指導力にあるのかは明らかにされていないが、関東の大学への進学を希望する高校生競技者を東北の大学に向けるためには、東北学連所属の大学の指導環境と指導力を充実させ、陸上競技面での魅力を持たせる必要がある。具体的には、以下に示すような計画が考えられ、東北地区に陸上競技の拠点となる大学を整備し、トータル・サポートシステムの確立が望まれる。とりわけ体育系大学である仙台大学が、重要拠点として活動することが必要であり、今後の先行的実践課題としたい。

- ① 高等学校－大学 一貫指導体制
  - e ラーニング（情報機器を媒体とした競技者側の活動とコーチング活動）
  - e コーチの導入（情報機器を媒体としたコーチング情報の提供）
- ② 医科学サポート体制
  - 測定・評価
  - メディカル・サポート
  - スポーツバイオメカニクスの分析サポート
  - 心理サポート
- ③ メンタリング・サポートシステム
  - カウンセリング（生活相談）
- ④ アスリート・キャリアサポート
  - 進学・進路支援、就学
- ⑤ その他

## 7. まとめ

以上から、所属学生競技者の競技力向上をは

はじめとした東北学連の活性化のためには、競技力の基盤となる登録競技者数の増加と競技力向上に関する課題解決策の策定と実施が課題であり。

課題として、以下のことが挙げられる。

① 東北学連への加盟校の増加（'00年度32大学）

② 各加盟大学との連携による競技者の増加（特に女子競技者）

③ 東北学連としての競技力向上

また、「陸上競技に興味を持たせる（普及活動）」「取り組みの意欲を向上させる（強化活動）」等を狙いとした対策として次のようなことが挙げられる。

a. 東北学連主催競技会の実施内容の検討

b. 東北学連と加盟大学および加盟大学間の連携強化

ア. 指導会、研修会、研究会等の開催（指導者の質・量の充実、競技者の質の向上）

イ. 大学間連携による合同練習会の実施（競技力向上、指導力の強化）

ウ. 加盟校間による対校戦の実施（競技力向上）

エ. その他（トレーナー講習会等の充実）

（注1）

日本ICでは（男子23種目、女子19種目を実施、8位までが入賞）入賞者数男子184、女子152であるが、'00年度、'01年大会での東北学連関係入賞者数は、表-4の通り。

表-4 '00、'01年度日本ICにおける  
東北学連関係入賞数

日本IC順位		1	2	3	4	5	6	7	8	計
'00	男子			1	3		1	4	1	10
	女子	6	3	1		1	1	1		13
'01	男子		1	2				1		4
	女子	2	2		1	1		3		9

（単位：種目数）

（注2）

女子3,000mの種目変更は、ユニバーシアード大会が5,000mに変更されたことに伴い、日本IC、東北ICとも'93年度から3,000mを5,000mに変更された。

#### 【参考・引用文献】

- 1) 伊東、小浦、関岡 陸上競技研究 第40号 p47-52 (社)日本学生陸上競技連合編 研究機関誌 陸上競技社
- 2) 本田勝嗣 (2000) メンタリングの技術 オーエス出版社
- 3) 関岡ほか 学生陸上競技界における競技力の比較分析 ～地区連盟所属男子競技者の競技力と伸び率の比較～ 仙台大学紀要 2000, Vol.32, No.1 pp1-
- 4) 日本学生陸上50傑集 平成3年度～平成12年度 (社)日本学生陸上競技連合
- 5) (社)日本学生陸上競技連合便覧 平成3年度～平成12年度
- 6) (社)日本学生陸上競技連合会報 平成3年度～平成12年度
- 7) (社)日本学生陸上競技連合学生競技者登録名簿 平成3年度～平成12年度
- 8) 日本学生陸上競技対校選手権大会プログラム 平成3年度～平成12年度
- 9) 東北学生陸上競技対校選手権大会プログラム 平成3年度～平成12年度
- 10) (財)日本オリンピック委員会強化事業部 競技者育成プログラム策定に向けて

（平成13年11月22日受付、平成13年11月22日受理）